

皆様、本日は秋季大祭おめでとうございます。

明主様が畏れ敬い、心から讃え、信頼しておられる主神は、唯一の神であります。

唯一の神ということは、明主様が「無限」あるいは「絶対」と仰せになりましたように、他と比べるべき存在ではないということです。他と優劣を競う存在ではないということです。

この世において様々な名前と呼ばれる神や仏として、あるいは、霊的な存在として表現されることはあっても、明主様が主神とお呼びになる神様は、ただお一方ひとかたであられ、その方が天地万物一切を創造し、今も刻一刻と創造し、すべてを治めておられます。

誠に畏れ多いことではありますが、その主神が、私どもの命の親であられ、私ども一人ひとりの中におられます。

主神は、ご自身の子をお生みになるために、創造の始まりの天国において、私どもをご自身の分わけ霊みたまとして生んでくださいました。そして、私どもを地上にお遣わしになり、意識あるものとしてくださいました。

今まさに主神は、私ども一人ひとりが、今度は意識あるものとして主神の子となることができるように養い育てておられます。

私どもの命と意識と魂は、人間のものではなく、主神のものです。

私どもは、この厳然たる事実を忘れてしまっていたことを悔い改めることのないまま、ご守護や奇蹟を限りなく追い求め、人間の幸福と発展を願い続けて生きてまいりました。

その姿は、まるで、夜の暗い闇の中で、親のもとに帰る道を見つけられずにいる迷い子のような姿だったのではないのでしょうか。

ところが、なんと幸せなことでしょう。こんな私どもを主神はお見捨てにはなさらず、顧みてくださいました。私どもをメシアという御名によって赦してくださいました。

それだけではなく、すべてのものが赦され、救われたものとして、天国に立ち返ることのできる道を、私どもの中に用意してくださいました。そして、もう一度、主神の子として生まれることができるようにしてくださいました。

なぜならば、主神は、私どもを一人残らず愛してくださっている、本当の親であられるからであると思います。

私どもは、もはや、主神を知ることのできなかった、古い夜の世界、闇の

世界にいるのではありません。

主神を知ることのできる、新しい昼の世界、光の世界にすでに迎え入れられ、養い育てられているのです。

この主神の最大の福音を、明主様は、ご自身の中で「夜昼転換」という事実としてお受けになり、すべては新しい昼の世界の中にあることをすべての人々と分かち合うべく、この教団をご立教になった、と私は思います。

主神は、「夜昼転換」をお受けになられた明主様を通して、私どもの中に、大光明という光が存在することを告げ知らせてくださいました。

そして、私どもの心の中の闇も曇りも、メシアの御名にあって、ご自身の光の中に吸収し、私どもを赦され、救われたものとしてくださいました。

主神は、私どもの中にある古いものをすべてご自身の中に迎え入れ、私どもを全く新しいものとしてお使いになりながら、養い育ててくださっているのです。

養い育ててくださっているということは、主神が私どもに対し、自分の中にある古いものに気づくことができるようにしてくださっている、ということです。

私どもが、自分の中には曇りがあり、我や執着など、古いものを引きずっていると感じるということは、私どもがすでに新しい昼の世界に入っているから、そのように感じさせていただけなのではないでしょうか。

主神は、「夜昼転換」によって、私どもが、命は人間のものではなく、主神ご自身の命であることを知ることができるようになりました。

限りある命しか知らなかった私どもを、主神の永遠の命の中に迎え入れてくださいました。

私どもは、主神の永遠の命に満ち満ちているのです。

だからこそ、私どもは主神に対し、“あなたはわたしの中で生きていらっしゃいますね、と申し上げることができるのではないのでしょうか。

明主様は、お歌に、

「魂おのれ機張る命の主は己にあらで神の御手おんてにあるを知れかし」
とお詠みになっておられます。

このお歌を通して、明主様は、主神が生きておられるからこそ、自分が生きていることを知って初めて、本当の意味で、生きた人間とやらせていただけるということを、私どもに気づかせてくださっているのではないのでしょうか。

私どもは、誰であろうと、天国にいる時から主神の命を賜っていたのです

から、この世の姿を持たせていただいている時も、そして、この世の姿を失ったあとも、いつまでもいつまでも生きるものとされているのです。

私どもの父母先祖の方々は、“わたしたちは生きています、と訴えていらっしゃると思います。先祖の方々も生きています。”

“甦る、”ということは、一旦死に至ったものが生き返ることと思うのではなく、たとえこの世の姿を失ったとしても、主神の永遠の命によって初めから生きたものとされているのです、と私どもが認めさせていただくことによって、本当の意味で“甦った、”と言えるのではないのでしょうか。

そして、私は、甦らなければならないのは、私自身であったと気づかせていただきました。

命が失われていくもの、限りあるものと思い込んでいた長い眠りから目覚め、先祖の方々が主神の命に満たされて生きていらっしゃると思わせただけで、先祖の方々に対する何よりの慰霊であり、供養であり、救いであると思わせていただきました。

と同時に、先祖の方々が自分の中で生きていらっしゃると思わせるからこそ、自分自身も、本当の意味で生きたものとならせていただくことができるのではないかと思いました。

また、明主様のお歌に、

「永遠とことわの生命の幸を作れかし此現世にありし間に」

というお歌があります。

明主様は、私どもがこの世で肉体を持たせていただいている間に、「永遠とことわの生命の幸」、すなわち、永遠の命という幸福を作りなさいと仰っています。

私どもは、私どもの始まりの天国において、主神より、永遠の命を継承する主神の子・メシアとならせていただけるという約束を賜っておりました。

明主様は、私どもの代表として、私どもに先駆けて、ご肉体をお持ちの間に、天国に立ち返られ、主神の命を改めて全身全霊にお受けになり、主神の子・メシアという立場を全うされ、この事実を「新しく生まれる」と仰せになりました。

私どもは、その明主様をお受けし、この世で肉体を持たせていただいている時こそ、明主様と共にあるメシアの御名にあって天国に立ち返らせていただき、明主様を模範として新しく生まれ、主神の子たるメシアという立場を全うさせていただくことが、永遠の命という、人間としての本当の幸福を作らせていただくことになるのではないのでしょうか。

皆様は、2カ月前の8月1日、「世界平和祈願祭」を迎えられました。

平和について、明主様は、『神の芸術』と題するみ教えの中で、「主義や思想というものは、自分の作った一種類の絵の具であるから、線の外まで塗り潰そうとしても不可能であるばかりか、他の同目的のものと摩擦を生ずることになり、これが鬭争の原因」となるとお説きになり、人間の主義や思想では平和をもたらすことができないことをみ教えくださいました。

このみ教えの中で、明主様は、「新世界が生まれるについて」「根幹をなすべきものは人類思想の革命であろう」とお述べになりましたが、私どもが“平和は主神のみがお持ちです、と心から認めさせていただくこと、このことが「人類思想の革命」なのではないかと思えます。

だからこそ、明主様は、

「国と国人と人との涯はてもなき争いさかひ止むるは神の外なき」

というお歌をお詠みになったのではないのでしょうか。

私は、誰よりも平和を願っていらっしゃるのには主神であると思えます。

主神は、束の間の平和ではなく、永遠の平和を願っていらっしゃいます。

その平和とは、主神と私ども人間との和であると思えます。

私どもは、“世界平和を祈ろう”、“人間同士仲良くしよう”、ということしか思いが至りませんが、主神と私どもとの和があってこそその世界平和であり、人間同士の和なのではないのでしょうか。

私ども人間は、主神のお姿も見えず、お声も聞こえないために、知らず識らず思い上がって、主神よりも自分が王様のようになり、主神と敵対する姿になっていたことに気づかずに生きてまいりました。

にも拘らず、主神は、「夜昼転換」という最大の福音によって、私どもをお赦しになり、私どもとの和を回復してくださいました。

主神が和を回復してくださったのは、私どもを愛してくださっているからです。

主神の愛には、主神ご自身の子を生むという真理が貫いています。

そして、主神は、平和だけではなく、真、善、美などのあらゆる価値や徳など、よいと言われるもののすべてをお持ちであられます。

ですから、すべての価値や徳は、主神に帰せられなければなりません。

讃えられるべきは主神でなければなりません。

私どもは、今日まで、進歩向上や修養、徳積みや利他などの名のもとに、主神のものである価値や徳を自分のものとし、主神の愛さえも自分のものとし、自分を価値あるもの、徳あるもの、愛あるものとするために努力してきたのではないのでしょうか。

また、人間の幸福という名のもとに、主神の喜び、楽しみを願うよりも、

人間の喜び、楽しみを願って生きてきたのではないのでしょうか。

人間の喜び、楽しみが、主神の喜び、楽しみであると勘違いしていたのではないのでしょうか。

明主様は、『感じの良い人』と題するみ教えの中で、ご自身について、「人が満足し喜ぶことにのみ心を置いている。といっても、別段道徳とか信仰上からではなく、自然にそうなる、つまり私の性格であろう」と仰せになると同時に、「こういう性格を神が与えたものであろう」とお述べになりました。

私は、明主様が、ご自身のことよりも、人のことを第一に思われるご性格について、「神が与えたものであろう」とお述べになったということは、私どもが自分の中にあるよいものを見いだしたとしても、それを自分の価値や徳とするのではなく、それは主神から来たものであり、主神に帰すべきものであることをみ教えくださっていると思います。

このようにして、あらゆる価値や徳は主神がお持ちであることを認め、それらを今まで自分のものとしていたことに気づき、それらすべてを主神に帰させていただくことが、主神に対する礼節であると思います。

その主神に対する礼節を私どもは忘れていたのではないのでしょうか。

明主様のお歌に、

「上も下も礼節守る国こそはまこと平和の風吹きぬらむ」、また、
「信仰の真髓こそは礼節を守るにありと知れよ信徒」

というお歌があります。

明主様は、私どもに対し、それぞれ地上での立場や役職に違いがあっても、私どもとの和を回復してくださった主神に感謝し、天国に立ち返って、主神をお讃えさせていただくという、主神に対する礼節を守ることこそ、信仰の真髓であるとみ教えくださっているように思います。

そして、このようにして、私どもが主神に対する礼節を守って初めて、主神の子たるメシアとして新しく生まれる道に大きく進ませていただけると私は信じております。

終わりに、私どもは、主神に対する礼節を守ることを思い出させてくださった明主様に感謝し、明主様と共にあるメシアの御名にあって、全人類とその父母先祖の方々と共に、万物と共に、主神をお讃えさせていただきます。そして、全く新しい信仰に目覚めさせていただきます。

ありがとうございました。

以上